

NPO法人オンザロード 東日本大震災プロジェクト活動報告書

平成 23 年 4 月 19 日～ 4 月 23 日

【石巻市基本情報】

- 担当地域名：宮城県石巻市渡波地区、女川町周辺
- 避難者人数：石巻市 11,364 人／女川町 1927 人
- 指定避難所数：石巻市 117 / 女川町 16
- 全壊家屋数+半壊家屋数：石巻市 28000 / 女川町 3067 ※4 月 22 日宮城県調べ
- ライフラインの復旧状況：水道は 4 月 16 日に広域で使用可能となりましたが、電気は地区によりまだ開通していません。

■現在の活動内容：



宮城県大崎市にあるキャンプ場でボランティアビレッジを運営しながら、生活しています。15日のプロジェクトが始まって1週間が経ちましたが、各班ごとの役割が明確になり、リーダーと各地域の関係が生まれてきています。

□各班の活動内容



●ドロかき出し・ガレキ撤去班

- ・171人（その内班長11人）
- ・終了件数：63件
- ・担当地区：石巻市渡波地区

震災から1ヶ月が経ち、被災者自身、そしてボランティアの活動の甲斐もあり、屋内の廃棄物をほとんどの家庭が運び終え、家の中からのほとんどのドロやゴミ、ガレキは撤去し終わっています。その反面で、渡波地区でのゴミ処理が問題となっています。道はゴミ、ガレキ、廃棄物の山で、外に出されたそれらは積み上げられ、大量の廃棄物となって、目の前にはばかります。人力では大量処理出来ないため、重機の必要性があるのです。オンザロードでは、この問題に取り組むことも復興の第一歩と考えています。以前から重機の募集をかけていたこともあり、現在、コンボ2台、クレーン1台、ダンプ1台が集まっており、運転しています。コンボやクレーンで拾い上げられた大量のガレキはダンプを使い、ゴミ処理場へ運び、最大限ゴミ処理に対応しています。

一方、石巻市流留地区は津波の影響はなかったものの、1.5mの地盤沈下が起こりました。そのため、大潮になると水が膝まで上がってきます。津波の被害が酷かった渡波保育所の園庭の周りに積み上げられている約 3000 袋、60トンの土のう袋を、ダンプを使って流留地区に持って行くことと冠水の防止になるということで、沢山の人が集まってきました。

「10人で3日掛かりだったけど、頑張った甲斐があった。目に見えること、見えにくいこと、2つの作業になるけど、どちらも大切なこと。常に相手の求める作業を追求していきたい。」とのボランティアの声があがりました。



●炊き出し班

- ・26人（その内班長2人）
- ・担当地区：渡波・女川
- ・炊きだし量：590食

主に女川町での炊き出しを社会福祉協議会から依頼され、受け持っています。

女川原子力発電所敷地内の体育館ではマグロのサイコロステーキと、干物をほぐした魚のどんぶり、さくら集会所ではスパムカレーライス、女川第一小学校では炊き込みご飯となめこの味噌汁を出しました。

今後の要望としては、漁師町ということもあって、寿司が一番にあげられました。



その他魚や天ぷら、そして加工品ではない生鮮野菜のキュウリ、トマト、レタスなどのサラダが食べたいとの声を聞きました。

1週間が経ち、ボランティア同士の連携の中で、炊き出しの形が整ってきました。避難所で炊きだしをすることもあれば、ライフラインも復旧している地域に集まってくる世帯への炊き出しもしています。

炊きだしに来られる方々の中に男性の姿はほとんどなく、大半が女性です。中には、今支えてくれている家族の大黒柱に、家であったため家族一緒に食べたいという想いから、「これに入れて」と、鍋を持ってくる人もいました。

「ただ数をこなすのではなく、炊きだしをすることで、楽しみの一つにして欲しい。区長さんからの「また来て下さい」と言われた言葉を励みにプロの飲食店のような場所を作っていきたい」と、ボランティアから。

また、可能な場所では、沢山の方々からいただいている支援物資を炊きだしと一緒にバザーでの提供も行っており、人気物資は新品のサンダルや子どものおもちゃ、肌着でした。今後の調達は、このような目線で考えられます。

ボランティアへの対応や生活面のケアを行う生活班に関しては、ボランティアの食事一日200食分の調理、ボランティアへの案内、送迎、洗濯やビレッジの補修作業を行っています。日々汗を流し働くボランティアの方々がより充実した生活となるように、細かいケアを心がけ、衛生面も重視し取り組んでいます。



●生活班

・参加人数：16人（その内班長1人）

参加してくれているボランティアの食事に、マーボー丼やカレーうどん、温野菜、すいとん鍋、豚キムチ、もつ鍋と、様々なメニューを用意しています。大量に作る食事の中でも、疲れた体には肉料理が人気でした。また、キャンプ場へ来てくれるボランティアに、リラックス出来る空間をとということで、モンゴルのゲルをイメージして作ったティパが2つ完成しました。この空間があることで、ボランティアのコミュニケーション、情報収集が可能になっています。調理師や建築家という専門職のボランティアの協力もあって、このような専門的な取り組みも可能になっています。



●仮設シャワー介助班

・13人（その内班長1人）

・支援者人数：903人

渡波地区の避難所、サンファンパーク駐車場で、毎日14時～19時までの活動、渡波保育所では薪から炊く入浴所での活動を継続しています。ガレキ撤去や家屋の片付けが終わったあとシャワーに来られる方々に、タオルや支援物資のレッドブル、牛乳、飲むヨーグルトの支給、モップ掛けや、床の掃除、ご老人には入浴時の介助を行っています。その他、支援物資の中で役にたつものがあれば、随時持って行き、支給しています。

裸の付き合いということもあって、被災者とのコミュニケーションを図りやすい場所でもあります。参加ボランティアの中に美容師がいたため、要請のある時には、得意分野を活かしてその場で臨時理容室も開いています。

また、シャワーは米軍のものなので、調節の位置が高く、使い勝手が悪かったり、水漏れなどもあるので、自衛隊に状況を伝えながら、改善出来る点をオンザロードでサポートしていています。



■支援者からの声：

- 渡波地区の活動に関して、ピブスが目立ってクチコミで広がっています。皆元気がよくて、仕事が早い！
- 渡波支所で行っている受け付けへ、噂を聞いて、ニーズ表を書きに来ました。
- ライフラインがまだ開通しておらず、また浸水地域なので、4日ぶりのシャワーで、とても感動した。
- 物資的なものは足りているので、電力が必要。
- どこでも物資の配給を平等に行って欲しい。

■活動予定内容：

- 幅広く、ニーズにあった活動ができるよう、そしてより多くの人の意見が聞けるよう、渡波地区・女川町だけでなく、広範囲の調査を進めていきたいと思います。
- ドロカき、ガレキ撤去班では、雨も多いので、引き続き作業中の安全を第一に考えるよう、安全マニュアルをより厳密に作成します。
- 渡波保育所の仮設シャワーに関しては、3個中、1個しか稼働していません。残りの2個の稼働に向け、まずは屋根を作れるように管理人に交渉を続けます。
- バザーの物資に関しては、本当に必要なもののサーチを常に心がけ、ニーズにあったものを募集していきたいと思います。
- 日々状況が変わっていく中で、どの班も臨機応変な活動内容を目指します。

■課題、ミッション：

ゴミ。ガレキ撤去で使用する重機の呼びかけと、車両系免許を持ったオペレーター募集を早急に行わなければなりません。ゴミの問題が大きくなる中で、重機を使用せざるを得ません。そこでこれからは、オンザロードと市から頼まれている民間会社との間、関係を考えながらの活動になっていくと思います。

また、こういう支援をしていく中で、被災者の方々の要望が大きくなっているのも事実です。私たちボランティアが行える活動とは一体何なのか、何を求められているのかを、被災者の方達のニーズと照らし合わせながら、復興に向け支援に臨みます。冠水地域やある程度のドロ、ガレキの撤去が終わった地域においては、まだまだ土のう袋の設置が必要になっているので対応していきたいです。また今後は、ホースやワイパー、ばけつ、雑巾など、掃除道具がより重要になります。先の支援を含めた物資募集にとりかかっていきたいと考えます。